

Title	小アジア・トルコ化の一側面：カラマン君侯国起原考
Sub Title	A sidelight on the history of the Turkification in Asia minor : the origin of the "Karaman Beiligi"
Author	三橋, 富治男(Mitsuhashi, Fujio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.3 (1975. 2) ,p.1(225)- 24(248)
JaLC DOI	
Abstract	This paper tries to offer the antithesis for the common concept or the fixed pattern concerning the historical current from the Seljuk Turks to the Ottoman Turks through the mediation of the Rum (Anadolu) Seljuk Sultanate. The Oguz-Turkmen's rebellions under the leadership of the Muslim Sufi Tarikat during the Rum Sultanate period (1077-1307 A.D) were the embryo of a newly-born powerful Turkish Emirate, that is "Karaman Beyligi" in the Tauros mountain area. Accordingly, the birth of this Emirate was the result of the social-religious movement, Babai movement by the Sufi Order in Asia Minor. As the "Karaman Beyligi" continued so long and affected so much to the Ottoman state that it was the strongest and the most troublesome rival against the Ottoman power which intended the hegemony over the Mediterranean World. The writer intends to make clear the following new views in this field. (1) The origin or the lineage of the state-builder of the "Karaman Beyligi", that is, Nure Sufi Bey. (2) The intimate mutual relation between Nure Sufi Bey and Baba Ilyas or Baba Ishak, the big leader in the Sufi movement. (3) Lumber industry as the economic basis ; lumbering, wood-working, charcoal-making and selling wood produced in the mountainous Tauros area.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19750200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小アジア・トルコ化の一側面

——カラマン君侯国起原考——

はしがき

三橋 富治 男

十三世紀の中葉、モンゴル勢力のアナトリアへの侵入直後、特に見受けられるルーム＝スルタン政権の衰頹化とイル汗の重圧下に喘ぐアナトリア社会において、なおまたオスマン勢力の抬頭しない乃至は又オスマン勢力の未だ強大化しない時期において、

(1)政治的な重要性 (2)支配領域の広袤 (3)その持つ力量 (4)政権的持続性 (5)周辺勢力、例えばシリア、エジプトを支配する＝ルームのスルタンとの相互関係等で注目しに価する存在がカラマン君侯国であった。その立場は、始め自己の主体性の確立を求めてルーム・スルタン権力に対抗するがモンゴル侵入後は、イル汗とセルジェーク、スルタン両極の間に介在して勢力の伸長保持に努め、ルーム＝スルタン政権消滅後はイル汗の支配からの離脱を計りイル汗任命のヴァリ「アナトリア総督」とは対立して一三二四年以後、旧セルジェークの首都コニア「コンヤ」を自らの首都に定めてその後釜に据ろうとする意欲が旺盛であること、一三三五年以降は、イル汗の宗主権を漸く振り切ったアナトリア在住トルクメン民衆層の間において声望と威信とが一層重きを加えたこと、ことに十四世紀に入ってからアナトリアの西北部に局限されたオスマン君侯国の状況と彼我対比する時比重の差が明瞭に捉えられるなどが特色として列挙できる。端的に云って、

その領有は、南部アナトリアにあってタウロス山脈の斜面を含めて地中海辺を含みアンタリア湾に延びる可成り広い地域を占有し、エーゲ海の入口を扼する海洋ベイリック、例えばメンテシェ君侯国などを除いてアナトリアでの最大のトルクメン・オウーズ政権であった。その存在はベイリックすなわち一介の辺境地方君侯政権といわんよりは、リカオニア（古称）で最大のカラマン・トルクメン「王国」として捉えた方が一層適切であった。

一三五四年には新興オスマン勢力の抬頭に備えてモンゴル勢力の残滓とでもいうべきエルテナ君侯と同盟するなど、一三八六年コニヤ近傍で始めて行なわれるカラマン対オスマンの戦闘の直後まで、カラマン勢力はオスマン勢力を上廻る強力な存在であり、ムラト一世の如きは、カラマンに対抗するためバルカンの陪臣国、例えばセルビアのデスポットなどより成る軍勢力を投入している。これに対抗してカラマン側は、オスマン勢力の地中海での霸權確立を阻止するため欧州キリスト教国との同盟を画策するなど複雑な睨み合いを演じている。

その政治的生命も長く、例えばサルール部衆の出目でカイセリのカーデイ職の家柄から抬頭し、カラマンとも競合するシヴァスのカドゥ・ブルハンエッディン・アフメットの政権（一三四四—九八）の如き比較的短命かつ泡沫的なものとの比ではなかった。

カラマン君侯国の自主、自立性は、アナトリアの統一を目差すバヤズイト一世の攻勢によっても失われることなく、チムールの小アジアへの侵入と干渉を転期に一時色褪せ掛けた往昔の栄光を反って回復しており、オスマン王朝初期歴代スルタン、例えば、メフメット一世、ムラト二世、メフメット二世の攻勢に対しても兎も角も持ちこたえた。特にメフメット二世に対してはアクコユル部の傑物ウズン・ハサン・ベイと提携するなど十五世紀後半まで存立を続けるのみならず政治的發言力を保有した。なお又カラマンの残存余衆は、勢力挽回のためバヤズイト二世と弟ジェム・スルタンとの対立抗争にも一役買っており、ジェムの側に立つてオスマン王家の内紛を助長し、なお十六世紀に入っては、カヌーニ・スレ

イマン（一五二六―二七年）に対し反乱を起している。このように眺めて来ると、勢力に消長があるにせよ、カラマン君侯国は、十三―十五世紀に掛けてのアナトリアにおけるトルコ族の動向を左右する程の比重をもつ存在であり、エディルネ、イスタンブル乃至カイロに対してよく自主、自立性を維持したと云える。総じて、カラマンの歴史は、Iオヴーズ（オグズ）時代、IIルームセルジューク時代、IIIオスマン時代、いずれにも関連性をもつが、茲では特に君侯国成立に問題点を絞り、セルジューク衰亡期とオスマン史料にあらわれるオスマンベイリック抬頭との丁度、端境期の空隙を埋める存在としてのこの君侯国に関し、起原ないし創建者のもつ、従ってこの君侯国のもつ基本性格を眺めることによって、アナトリアのトルコ化を探究する一助としたい。兼ねて「ネシュリーターリヒ」を始めオスマン古典史述には「カラマンル」とか「デウレティ―カラマン」といった形での言及に遭遇するので、そうした知見を集約する上での一助にも資したい。

二 出目説をめぐって

カラマン君侯国の政治的構成体の中核をなす部族集団を便宜上カラマン部衆と呼んでおくが、その出目に関しては現代トルコの史学界でも厳密には確定されていない。

一箇の研究課題として問題提示したのは故ファトマ・キョプリュ教授で「トゥルキヤトメジムアスウ」〔巻一〕（一九二五年）にカラマン部族集団は、サルール・オウーズからの分岐であると主張して以後サルール出自説が一応肯定される形となった。又『同誌』（巻二）（一九二八年）で、アフメット・ナジニハルが、この所説を地名考証の面から擁護するためサルールとの関連において、カラマンル、乃至カラマン・キョイという地名を十七郷村について列挙している。⁽²⁾

サルール部族集団に就いての知見としては、大セルジューク朝マリク・シャー時代の頃クルデスタンに來住して土着の

クルド族との間で所領争いが絶えず、ヒジュラ暦四九五年(西暦一一〇一、二二年)にはサルールの君長カラ・ベリ(Kara Bel)が、クルド族の君長スフラ・ブ・ビン・ベドル(Suhrab b. Bedr)の所領を侵犯し部下二千名を仆したという記録が残され可成り慍悍な部族集団として記録に残されている。

ともあれ、ファト・キョプリユやアフメット・ナジ・ニハルの所説の影響からか、ポウル・ウイテック教授も、わざわざ彼の名著の一つでトルコ訳もある『メンテシェ君侯国考』⁽⁴⁾においても右様所説を引用している。

だが、その後これに対する反論が出始めた。例えば、イスタンブル大学のシヤハベッティン・テキンダウ教授が、トルコ版『イスラム・アンシクロペディス』の「カラマンルラル」の条で、この部族をサルールのウルスと関係づけるのは断じて正しくないと可成り強い句調でサルール出自説を斥け否定し去っていることである。⁽⁵⁾

こうした経緯の影響からか、現代トルコ史学界の最長老格、イスマイル・ハック・ウズンチャルシユル教授は、オグ・ズ・トルクメン系部族集団の歩んだ史上で重要な役割を果たしたサルールないしアフシャル、その中の一つに関係づけられると両説を併記し、その後さらに「アフシャル近縁部衆」と修正している。⁽⁶⁾⁽⁷⁾

ゼキ・ウエルディ・トガン教授は、その著述のなかでは、⁽⁸⁾カラマン君侯国の出目の問題には触れないが、その門下で政治学専攻の学究タフシン・ユナルは、専著『カラマン君侯国史』(Tahsin Ünal: Karamanoğulları Tarihi 1957 Ankara)の一齣で、十三世紀にアフシャル族が諸他オウズ・トルクメン部衆の助力で当該君侯国を創建した当事者か、乃至は又、少くとも君侯国形成に対して重要な役割を果たした助力者とする所説を以って「弱くない強力な仮定」と見做し乍ら次の如く結論する。

「……とはいえ、可能性と確乎たる論拠を以ってカラマン君侯がアフシャル族の出目とする決定は導き出せない。アフシャル族であるといった明確な用語は使用されない。とりわけ単一部族が巨大な国家を創り出すということはトル

コ史上では到底有りえない。創建される国家に於いては、この創建に全精力を傾けて奉仕したところの夥しい数多くの部族の全力をあげての協力と参加とが認められる。このようにしてカラマン国家の形成に於いてアフシャル族の努力と参加とは有りうる。だからといってこのことが直ちにカラマン君侯がアフシャル族と関係があったことにはならない。だがカラマン国家の創建からその没落までの間に生じた出来事を念頭に置いて考察されるならば、そうした説話も又、幾分かの妥当性があり傾聴する必要がある」(S.24)

というのが吾人の見解であると疑念を挟み乍らも示唆に富んだ肯定的見解の傾斜を表明している。

省みて現代トルコ史学界が国家成立に関してその中核となるべき部族集団の出目にこだわるのはそれなりの意味があるかも知れない。だがこの論考を進める上で、部族集団出自如何は、必ずしも重要かつ決定的な意味合いを持つ問題点とは思われないし、エスノロジカルにも余り意味がないという観点から、又トルコ学界の趨勢を勘考して、とりわけオウーズ部族集団研究の面で知名度の高いアンカラ大学のファルク・シュメール教授の代表的な名著ともいえるべき『オウーズ史考』(Faruk Sümer: Oğuzlar (Türkmenler) Tarihi- Boy Teşkilâtı-Destanlar A.Ü.D.T.C.F. 1967. Ankara Yanlar 170.)で、オスマン古典史家ヤズオウル・アリ(十五世紀)の陳述を論拠に可能性ある所説として、カラマン・アフシャル出自説を支持しているので暫くそれに準拠したい。

そこで、宛もカイウ・オウーズとオスマン部族集団とに見受けられる関係同様、カラマン部衆をアフシャル・ウルスの一つのコル(分枝)とすれば、アフシャル基幹部族との相互間関係において眺めることが可能と思われる。

では、(一)アフシャルのユルト「郷土」は何処に比定されるか、(二)カラマン部衆がアフシャル基幹部集団からどのような事情で分岐し又どのような事情で移動を行ったか、その動機は何か、(三)アナトリアには直行したものか迂回して到来したものか、(四)何時頃又如何にして到来したか、又その間の時間経過はどうか、(五)カラマン地区と呼ばれるアナトリア

の特定地域、具体的にはチクロヴァすなわチキリアの西部に当るエルメナーク (Ermenak) の山岳の多い地区にどのようにして定著し、又如何なる生活形態を保持したか、(六)如何なる事情でベイリック、乃至オウルラルと呼ばれる君侯領の建設者となりえたか、そのバックボーンは何か、といった幾つかの基本問題が浮かび上って来る筈である。

抑々オウズ部族集団の歴史に関する知見はファルク・シメール教授が示した方法、つまりオウズ自身の言葉で語り伝えられてやがて文字に表記されたる過去の重要な出来事、戦い、英雄的行為を詩化する形で出来あがった、いわゆるデスタン「伝承説話」や、アナトリア諸地域に伝わるタフリル・デフテリ「土地台帳」とかカーデイのスイジイル「記録」などを通じての研究となろうが、まずデスタンによってアフシャルの出自を訊ねれば、トルコ族の始祖オウズ・ハンの六子の中の第三子イルドゥズ・ハンの孫アフシャルの末裔として表現されている。

アフシャルという部族名もこの遠祖に由来するものと伝えられている。この名称を最初に掲げているのは、マフムト・アル・カシュガリーで、『ディワン・ルギヤト・アト・トルク』である。いわゆるボズ・オク「灰色の矢」の系統に属し、十世紀頃ウスト・ウルト方面からファレズム、ないしマワラン・ナフル、ホラーサン方面を逐次転々として移動し、イスラム化以前から可成り知名の部衆であった。ラシド・ウッ・ディンの『集史』(第一巻第一編)によるとアフシャルの語義は「敏捷な、抜目のない、狩猟や鷹狩を熱愛する」という意味合いで、タムガ「部族標識」は、X、オンゴン「トーテム」は、タウシャンジル「鷹」の一種、なお祝宴の時饗応される肉片は右脇肉と指摘されている。ラシド・ウッ・ディンは、オウズの中で可成り重きを置かれた事情について次のようなエピソードを掲げている。

「……オグーズ・ヤグブ「葉護」の世継ぎトウメン・ハンの摂政キュル・エルキン・ハンは従前、自分の息女をアフシャル・イリ「イリは部族集団の連合体」のレイス「君長」アイネの息子に与える約束をした。併し為政者たちは「この娘を」成年期に達した「上記」トウメンに娶せることにした。アイネはこの決定に抗して叛旗を翻えして対抗した。勃発

した戦闘でアイネの息子は討死しアイネ自身は逃亡した。だがキュルルエルキンハン¹⁰は暫く間においてアイネのもとに使者を派遣して自分の面前に出頭するように求めその旧領を返してやった」とある。

ファルクシユメールは『ファトキョプリユ還暦記念論集』掲載の一論考『アフシャルに関して』でことさらにこの説話を脚註に引用するのは意味を認めてのことであろう。

恐らくアフシャル部族集団は十世紀の二十年代「タフシンユナルは九二〇年以後とする」以降にイスラム教を受容し、クヌク、サルール、バヤートの如き他のムスルマンオウーズ部衆と同様、サーマン朝(874-799)、ガズネ朝(962-1186)、カラハン朝(940頃-1123)などに奉仕し、やがて大セルジューク朝の勃興と西漸活動に乗じてアナトリア入りをしたというのが通説である。それ以前既にシリア方面に移動しその地で部衆人口が増加したとも云われている。

ではカラマン部衆は何時ごろどのようにして基幹集団から分岐したものであろうか。

シャハベッティンテキンダウ教授の見解に耳を傾けよう。カラマン部衆は、アムダリアの近傍のイリヤハク(Ilyak)と呼ばれる地域乃至アムダリアの西方にあるバルカン(Balkan)と呼ばれる山岳地に生活していたというが、この時点では既に基幹集団から分岐していたものと解し、ナシルウッティンマルグナニ(Nasir ud-Din Margunani)の(Maṣāyih-i Türk)「トルコ族のスーフィ聖者」という古典を典拠として示している。

次いでカラマン部衆に関する特殊史を書いたヤルジャニ(Yarcāni)という人物の記述に基いて、カラマン部衆は、マワランナフルやホラサーン方面からアナトリアに直行した訳ではなく諸地域に滞留し可成り迂回して転移した証拠としてアゼルバイジャンのシルヴァン地域に居住していた事実を指摘する。

現在シルヴァン地区のギョクチャイ(Gökçay)シャマヒ(Samahī)シェウアンシル(Cevansir)ジウウアド(Cirvad)という四つのカーザ[郡]のなかにカラマンルという名称を冠した四個の村落があるのは、如上の名残りであると

している。このことに就いては既述のファト⁽¹¹⁾キョプリユ教授の論考『トウルキャト⁽¹¹⁾メジムアスウ』掲載の「オウーズの人種学に関する歴史ノート」のうちに触れられている。

なお又、このことに関連して、カラマンルないしエミール⁽¹²⁾カラマンという人名も散見している由で、例えばフェルハト⁽¹²⁾ハン⁽¹²⁾カラマンルという人物はイル汗ウルジャイトウにとって親しい朋友の間柄であったとも云われている。

なお、シャハベッティン⁽¹³⁾テキンダウ教授の言及によると『集史』の一写本には、このフェルハト⁽¹³⁾ハン⁽¹³⁾カラマンルについての言及がある由。なお又、カール⁽¹⁴⁾ヤーン (Karl Jahn) は、著述『ラシド⁽¹⁴⁾ウッ⁽¹⁴⁾デインのオグーズ史⁽¹⁴⁾』でもフワレズムシャ⁽¹⁴⁾ーに関する記述の後に人名としてカラマン⁽¹⁴⁾ベイの名称を訳述しており、特にファルク⁽¹⁴⁾シユメールの『オウーズに関するデスタンの性質に就ての作品』を脚註に採用している。

それとは別にアンカラ大学のアクダウ⁽¹⁵⁾ニメト⁽¹⁵⁾クラト教授の『四世紀より十八世紀までのトルコ諸部族と諸国家』によると、ペチェネ⁽¹⁵⁾グ族との関連にてカラマンという部族名が出ており、又、サファ⁽¹⁵⁾ヴィ王朝治下のイランの軍団組織のなかに「カラマンル」という名称を冠する族長名が散見している。

ともあれ、茲で論ずるカラマン部衆が、アナトリアへの進出以前にアゼルバイジャンに滞留したことは事実と受けとめてよいようである。とすれば、カラマン部衆はどのようにして、アナトリア入りをしたか。

第一の所説として、まず、ラシド⁽¹⁶⁾ウッ⁽¹⁶⁾デインの記述を援用して、カラマンとエシエレフの部衆は約二万のチャドル〔帳幕〕を含む大集団を以って、大セルジュ⁽¹⁶⁾ーク⁽¹⁶⁾スルタン、トゥグリル⁽¹⁶⁾ベグと行動を共にしてアナトリアに入り、この王者がイランに帰還して後も、その儘アナトリアに居坐ったというのである。

第二の所説は、マウラーナ⁽¹⁷⁾メフメット⁽¹⁷⁾ネシュリー⁽¹⁷⁾の『キターブ⁽¹⁷⁾ウッ⁽¹⁷⁾ジハンニユマ』一名ネシュリ⁽¹⁷⁾ターリヒ⁽¹⁷⁾のうち『İbtidau Zuhûri Karaman min Etrâkî Ermenâk』(エルメナークのトルコ族からカラマンの出現のはじめ)の一齣

を引用して彼らのアナトリア入りは、いわゆる「モンゴル・ショック」によるものとする。⁽¹⁶⁾

そうした資料を典拠として上記シャハベッティン・テキンダウは次の如く推測する。カラマン部衆は恐らく他のトルクメン・オウーズ諸族の如く、十三世紀の前半以降継続するモンゴルの大掛りな侵入を前にしてマワランナフルを見限って、ひとまずアゼルバイジャンに集団移動し、部衆の一部はこの地に残留して後世さまざまな政治問題に関与し、大部分は、シリアやアナトリア方面に向けて更に西進を続けたものと推論する。

総じて云えばトルコの史学者はトルクメン・オウーズの西方移動の動機や誘因について一様に「モンゴル・ショック」の随伴現象として捉え勝ちであるが、それ以外に例えば部族内紛激化のためとか、気候異変のためとか、今のところそれが何であるか把握しえない政治、社会経済史的な要因があったのではないかといった、さまざまな疑問設定には余り関心が寄せられてない傾向がみられる。

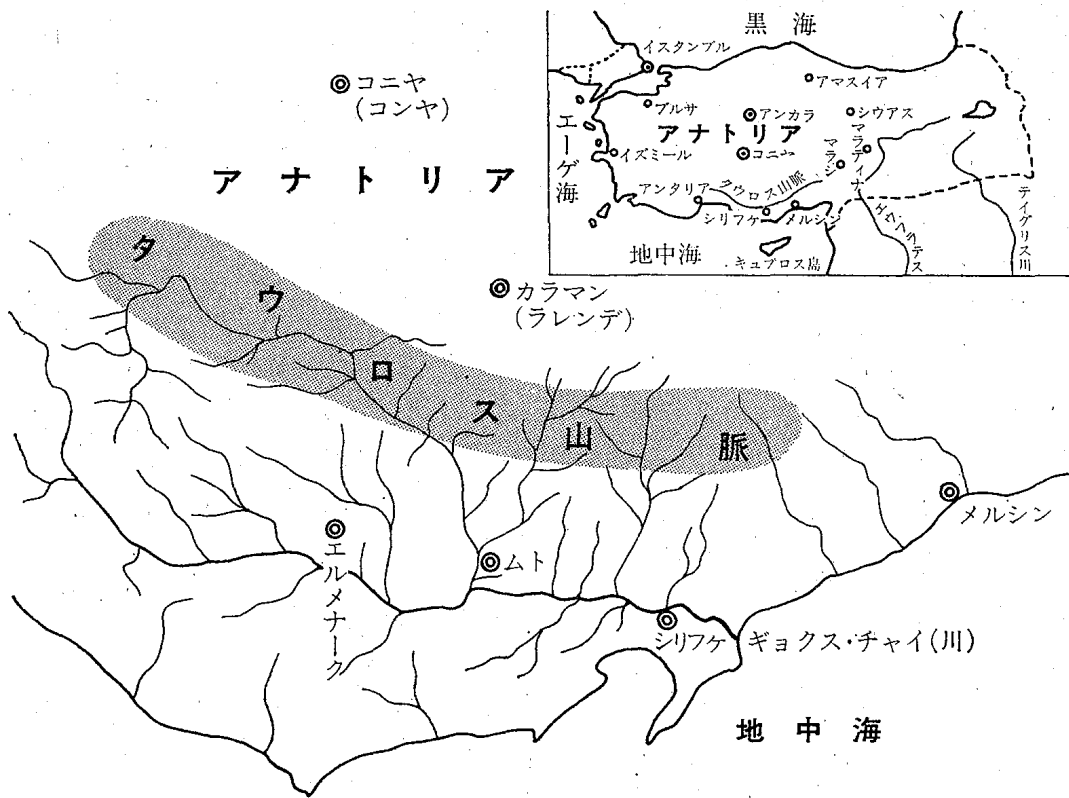
註

- (1) Fuad Köprülü: *Oğuz etnolojisine dair tarihi notlar*. Türkiye Mecmuası Cilt I, 1925, S. 193 参照
- (2) Ahmet Naci Nihal: *Anadolu'da Türklere ait isimleri*. Türkiye Mecmuası Cilt II, 1928, S. 202-203
- (3) Faruk Sümer: *Oğuzlar (Türkmenler) Tarihleri*. Boy Teşkilâtı-Destaneleri S. 126, Ankara 1967.
- (4) Paul Wittek: *Das Fürstentum Mentesch* 土メンテシュ *Menteshe Beyliği*, 1944, T. T. K. Y. IV. Seri No. 1, 28-29 脚註参照
- (5) *İslâm Ansiklopedisi, İslâm Âlemi Tarih, Coğrafya*.
- Etnografya ve Biyografya Lugati, Karamanlılar ⑧ 参照
- (6) İsmail Hakkı Uzunçarşılı: *Dünya Tarihi 16, Osmanlı Tarihi*. Cilt. I, Ankara, 1961, S. 43.
- (7) “: *Anadolu Beylikleri ve Akkoyunlu Karakoyunlu Devletleri*, Ankara, 1969, S. 1.
- (8) Zeki Veldi Togan: *Umumi Türk Tarihine Giriş*. Cilt. I, *En Eski Devirlerden 16 asra kadar II*, Baskı (初版本) 土著史の異同 ⑧ İstanbul, oğulları ⑧ 参照
- (9) Faruk Sümer 土著史 p. 159 & p. 260 参照 オスマン史 著 Yazarı-oğlu Ali 著 Tarih-i Âl-i Selçuk (Topkapı

- Saray, Revan Kutuphane, nr. 1390 (写本) を論拠とせる。
- (10) Fuad Köprülü Armağanı, (1953, İstanbul,) Avşar-lara dair, S. 469.
- (11) 註一、前掲書 S. 194.
- (12) Österreichische Akademie der Wissenschaften.
Karl Jahn: Die Geschichte der Oguzen des Rašid Ad-Din, Wien, 1969, S. 68 参照
- (13) Faruk Sümer: Oğuzlara ait destanî mahiyette eser (A. Ü. D. T. C. F. Dergisi XVII) 1959, S. 385.
- (14) Akdağ Nimet Kurat: IV-XVIII Yüzyıllarda Türk Kavimleri ve Devletleri (T. T. K. Ankara), S. 57.
- (15) ネシエリーと、その著作「キターブウ」ジハンニナマ」に關しては「拙稿ネシエリー・タリーヒの復活」千葉大学文理学部『文化科学紀要』第三輯 (1961) p. 1-37 参照
- (16) Mehmed Neşri: Kitâb-ı Cihan-Nümâ, Neşri Tarihi I Cilt, Faik Reşit Unat, Mehmed A. Köymen, T. T. K. Ankara, 1949, S. 43-45.

三 君侯国形成への要因

ルームセルジューク王朝のスルタン、アラユッティン・ケイクバート一世 (1219-36) は、一二二八年頃から三〇年頃にかけてチャシュニギヤル (Çaŋnigâr 意味は大膳寮毒見役) の職名をもつエミール・ミューバレゼディン・チャウルウ (Emir Mubarezeddin Çavlı) と、セルレシユケル (Serleşker 意味は軍司令官) の肩書をもつミューバレゼディン・エルタクシュ・アタベイ (Mubarezeddin Eltakuš Atabeg) に命じて、未だ完全に征服されていないキリキア方面の討平に従事させ、その結果、エルメナーク (Ermenâk) ムト (Mut) ギュルナル (Gülner)、シリフケ (Silifke) などを含むこの地域の大半を自己の範囲の中に吸収し、シリフケからアダナに至る東地中海沿いの海岸線とこの方面を通過する、一般にバハル・ヨルウ (胡椒路の意) と呼ばれる通商ルートを確保した。この両武将の事蹟に關しては、イブン・ビビの『セルジューク・ナーメ』にも時折散見するが、⁽¹⁾この者たちがアルメニア人から取得した西部タウロス山系中のエルメナークは、ビザンティン時代のイゾリア州のゲルマニコポリス地区、オスマン帝国時代のアダナ・ヴィラエットのイ



チエル・サンジャク (İçel Sancak) 現今のコニア州のカムシュ (Kamış) なしヴァルサク (Varsak) と呼ばれるカーザ (Kaza 郡) に該当するが、このカーザには、上記のサルール、アフシャールはじめ、その他のオウーズ系部族集団が入り込み、それぞれがウジを構えてウジ・ベイを選出した。この際この方面とキリキアの境界に定着したのがカラマン部衆であった。

カラマンの名称起原について誤解ではあるがこの部衆が最初に定着したエルメナークの別名カマルッディン・イリの音訛説が生ずるのもそうした経緯と無関係ではありえないのである。カラマン部衆の生活様式は、諸他の遊牧民とやゝ趣きを異にしていたことに留意したい。オウーズといえはノマードという意識が先行するが、カラマン部衆の場合には必ずしも宛てはまらない。

このことは地形条件や生活環境と密接な関係がある。最高標高三、五八五メートル「一、一七六〇呎」の稜線をもつタウロス山系には地中海に注ぐギョクス・チャイ (Göksu Çayı) の本支流に沿って溪谷斜面が多くて、針葉樹、松柏類が繁茂し、特に松樹が多いとされている。⁽²⁾ そうした関係からカラマン部衆は立木の伐採や、製材者、木工、炭焼き、猟師など山仕事に従事する者が多

く、さらに先住キリスト教土着民から休閒地 (Nadas) を借用して地代を支払う小規模の農耕者も存在した。勿論、羊、山羊、驢馬、馬匹類の飼育者もなかった訳ではない。カラマン部衆は右様森林資源依存の生活に追われる限り格別政治・軍事的な動きは示さなかった。だが隣接地域居住アルメニア人の弱体化を眺めた時、事情は一変した。彼らを放逐して保有地を略取する意欲が俄かにより上って来たからである。⁽³⁾

次に注目したい事柄はカラマン部衆がエルメナーク地区に定着した際、既に大部族集団であったとの報告がなされていることである。⁽⁴⁾

タフシン＝ユナルは、カラマン君侯国形成を準備する一つの要因として特にこの点を指摘する。元来オウーズ部族集団はそれ程人口の多いものでないというのが吾々の通念である。数字に誇張があるのではないかという疑念に対して、ユナルは、現在カラマン (ラレンデ) とムトを結ぶ街道筋に分布するサルールやアフシャル系住民の分布状態から推して決して誇張ではないと主張してやまない。

ユナルは具体的に数字を示して、エルメナーク方面に定着した部族集団は、凡そ二万のチャドル〔帳幕〕乃至は一万のオバ〔帳幕群〕より編成されていたと見做している。参考までに、「チャドル」と「オバ」との関係に一言触れておくと、一個の「オバ」は、五個ないし八個の「チャドル」から構成されていた。例えば仮りに一個の「チャドル」が平均五名の家族構成とすると、「チャドル」二万として算出する場合凡そ十万、「オバ」一万として算出すると概略約二十五万という数字が出てくる。勿論この場合、アナトリアの他地区やシリア方面居住のカラマン余衆は除外視しての数字である時と共にエルメナークの境界において急速な発展をとげ始めるカラマン部衆に合流した余衆を加えるとその数量は更に増加する。とするとエルメナーク地区のカラマン部衆の数は合流者を加えて二七万～三〇万を超えるであろう。この数字は単にカラマン部衆だけである。カラマンの傘下に入った他の部族集団の数量も相当のトータルにのぼる。恐らく十万を下るまいと

されている。従ってそれらを集計すれば大約四十万に達する。この算定方式はその儘鵜呑みに出来ないにせよ、仮定的乍らも量的優位な部族集団であったと云える。ユナルは保有人口数量がカラマン君侯国成立の重要条件であったとする⁽⁵⁾。これを要するに如上のような、居住地域、生活形態、生産様式、人口数量の総和が、この君侯国の成立に寄与したと推論し得るのではなからうか。必要なのはそれら単一政治勢力にまとめあげる有能な指導力に富むリーダーの出現であった。次節で述べるサァデイデイン^{II}ヌレ^{II}スーフイ^{II}ベイ(Sadeddin Nûre Suî Bey)こそそのリーダーに他ならなかったのである。

註

p. 2-10 参照

(1) İbn Bibi: *Kitab al Avamir al Alâ'iya fi'l Umûr*

(2) 民俗研究者、進藤幸彦氏の現地報告に基く

ii Alâ'iya.

(3) Tahsin Ünal: *Karamanoğulları Tarihi* (Türkçe

拙稿「小アジア(ルーム)——セルジューク朝史研究のための本

Kaynaklara göre) 1957, Ankara, p. 29.

原史料と傍証史料千葉大学『文化科学紀要』第二輯 (1960)

(4)(5) *ibid.* S. 45.

四 始祖ヌレ^{II}スーフイ^{II}ベイ

トルコ史家により一般に容認される所説ではカラマン^{II}オウルラルと汎称される王家の始祖はヌレ^{II}スーフイ^{II}ベイという名称で呼ばれる。文字通り「イスラム神秘主義者の光り」と自称するこの人物を、その活動を許した時代と背景とを見極めるための媒体として経歴について簡単に触れておきたい。

カラマン部族集団の出自がそうであったように、このヌレ^{II}スーフイ^{II}ヘイについても処理すべきさまざまな問題点がかかえている。

第一の問題点は、ヌレ^{II}スーフイ^{II}ベイの素姓についてのさまざまな臆測自体もさることながら彼が自己の世継ぎで実

質的な創造者に見倣される子息ケリミューデイン (Kerimüddin) に対し、特に「カラマン・ベイ」という部族名を冠した所以ないし意図は何であつたかという点。第二の問題点は、イブン・ビビが『セルジューク・ナーメ』において示した態度、具体的にはルーム・セルジューク朝という体制側の立場に立ち、しかも伝聞そのものを無批判に近い態度で歴史組み立ての素材とする従来の方式に其儘準拠してよいものかという点。第三の問題点は、如上にも増して重要な事項であるが、オスマン古典史家のカラマン史を取り扱う場合の基本態度である。それらの古典史家は、元来カラマン君侯に対して決して好意的でなかったこと、むしろその存在をオスマン王朝の利益に反する有害なる、云うなれば不倶戴天の要素として受けとめている点。またカラマン君侯の事蹟については出来得る限り過小評価しようと努力しているかに見える点が極めて気に懸る。例えばオスマン史家のなかには「その場処 (エルメナーク) の住民は雑兵であり盜賊であり追剝ぎ共である」とさえ極言して憚らない⁽¹⁾。比較的好意ある見方をする史家さえもが「彼らは野盜に類する炭焼人夫の子弟である」と陳述している⁽²⁾。大なり小なりこのようなライヴァル意識が露骨で、カラマン君侯に敵意を示すと云うよりは、むしろオスマン王朝支配の正当化を主張して熄まない御用史家ないし官僚史家の素直でない、いわば偏向的な修史態度は、現今の史家に対しても微妙な陰影を投げ掛けている事情などを思い合わせるとそうした伝統的な先入観や考え方の投影をひとまず払拭してかゝる必要があるう。

さてそうした配慮を前提においてヌレ・スーフィ・ベイの素姓に移るが、伝承によると、父はアフメッド・サアディディン・ベイと云い、ババイのシェイフの一人であつたと云われる。

一部の史家は「エルメナークとその近傍に居住したトルクメン族出身の木樵りであり、炭焼きであつた」と述べる。これは、イブン・ビビがヌレ・スーフィを記述するに当って「カマルッディン・イリの者で、タウロス山岳地帯からラレンデ (カラマン) に木炭を運搬して家族を扶養する炭焼きであつた」と述べるのを楯に取ってヌレ・スーフィ・ベイを下層

階級の出身で素姓いやしき下賤な民として描写しているかに見える。⁽³⁾ ヌレⅡスーフィⅡベイの人となり、事蹟の上から云えば、出自や職業、乃至所属階層が問題ではない。十三世紀アナトリアの諸地域を風靡した「ババイ運動」を指導するデルヴィシュ（スーフィ）のシェイフ（ババ）であった事実の方がより重要な意義を持っている。

「ババイ運動」の本質なり、指導性については別に拙稿「十三世紀アナトリアに於けるババイ運動とその帰結」（オリエント学会誌「オリエント」vol. XVIII-No. 2に掲載）を用意しているので、詳細はそれに譲るが、特徴的に眺めれば、ババイ運動の指導者グループを形成するババは、オウーズ民衆に対する極めて強い影響力を持ったスーフィの説教師であると同時にトルコ族の古い地方伝統を保持し継承するシャーマンの側面を持ち、アナトリアばかりでなく、アゼルバイジャンや、その他のカフカース地域にも見出せるが、アナトリアでは宗教的、思想的な面での積極的な布教者、社会的、経済的、とくに政治、軍事的な面での民衆運動の組織者としての特色をもっていた。とりわけ地方郷村や辺境地帯に於いてその傾向が顕著であった。

その持つ民衆的な本来の体質と民衆に対する吸引力の点で、又行政管理面での紊乱や社会、経済的危機感の発生に対し、民衆の側からする時の政治ないし為政者に対する抗議運動の支柱であったことで、ルームⅡセルジューク朝からは極めて危険視される存在であった。ババイの輪廓については Bernard Lewis⁽⁴⁾ や Claude Cahen 教授の所説に要約される。⁽⁵⁾

ヌレⅡスーフィⅡベイが特定の Tarika（スーフィ教団）に入門してシェイフとしてババの資格と機能とを部衆に発揮するようになったのは一二三一年頃と推定される。すなわち、彼がカラマン部衆を率いて上述エルメナーク地区のカムシユないしヴァルサクのカーザに定着したのが一二二八年とすれば約三年後ということになる。

その「タリーカ」は「スーフィ」ないし「タリーカ」の本場とでも云うべきホラサーン出身の Baba İlyas と Horasanlı Sücaddin İlyas の門で、この人物の持つ特定の信条や人物などに傾倒したものらしい。ババⅡイリアス門下にはヌレⅡ

スーフィー・ベイのほかは、Muhlis Baba, Otman Baba, Geyikli Baba, Burak Baba の如き錚々たるシェイフが指導集団を形成していた。「タリーカ」の伝えるエフサネ〔伝承〕に依ると、それらのババたちは時を追うてアナトリアの各地、例えばアンカラ、チャブク、ブルサなどに分散してそれぞれ信徒を獲得し勢力を漸次伸長したと云われる。総じてババ・イリアスの門下には、カスピ海の西南隅のギーラン、特にアルデビルから来住したいわゆる *Heterodox wandering Sufi* が紛れ込んでおり、イスマイリア派の信条に共鳴する同調者が数多く見出されたところから眺めれば、この「タリーカ」は、まさしくシイア派の系統を引くものと解して差支えない。

タフシン・ユナルに依れば、それはイランとくに *Batiniye* ⁽⁹⁾ とは一線を画する民族的色彩の強い、敢えて名づけければ、《Türk Siligi》《Türkmen Aleviligi》と解すべき立場にあったと解釈している。

この現代トルコの史学者の表現はさらに次の如く布衍できる。すなわち、多分に非正統派的なイスラムの信条と、イスラム化以前、内陸アジアのトルコ・モンゴル部族社会に於いて「Kam」に奉仕し専ら祈祷、呪術、医療などに従事した、いわゆる「トライヴァル・シャーマン」の直系末裔たちに当る旅回りシャーマンの勤行とがオーバラップした姿が東部アナトリアに於けるトルコ系スーフィー・シェイフ、ババの思想心情の実体であったと解すべきで、ことに上エウフラテス流域近辺のオウーズ部族集団を吸引する最大の要因となった。

時宛もオウーズ・トルクメンのエネルギーが結晶しつつある時点と符合していた。

一二三四年頃、「タリーカ」の総帥ババ・イリアスは同門修道士の *Baba Ishak* (しばしば混同視されるが両者の関係については別稿参照) と組んで、主にアナトリアの都市におけるスンニー・モスLEM人口を基調に形成されたセルジューク体制から「はみ出した」トルクメン部族集団を駆り立て、アマシアから東部アナトリア一帯にかけて反乱を繰りひろげ、ババ、オウーズ、ウジ・ベイ勢力がこもセルジュークの支配領域を震撼し王朝自体を恐慌状態に陥れた。この大反乱

に関するイブン・ビビの陳述はソ連のゴルドレフスキーの手きびしい批判を受け乍らも他にかけ替えのない根本資料であることは従前に触れておいた。⁽⁸⁾

ゴルドレフスキーの指摘を借用すれば「トルクメン族の間に勃発したる社会的、宗教的、反貴族的、見方によっては明らかに反封建的な属性や様相をもつ」…この反乱部衆は、セルジューク側の討伐派遣軍団を各地で打ち破り、アマスィア、トカット、マラティアなど概略、クズル・ウルマクとイエスイル・ウルマク両大河の流域地帯を支配して約五ヶ年の間持ちこたえた。だが、この反乱も幾つかの困難に蓬着して行き詰り、一二三八年にアンカラの東南、カイセリの西北にあるクルシェヒール(Kırşehir)近傍のマリヤ・オヴァ(Maliya Ova)の平原で、又その翌年には本拠アマスィア近傍で、セルジューク討伐軍団のために敗北を喫し、敢えなくも潰滅・鎮圧されてしまった。イブン・ビビの表現を借用すれば「禍の松明(たいまつ)の炎が揉み消された」のである。

ところで事件落着後、反乱に関与したババ、シェイフに対する詮議はきびしく、南部アナトリアでも東部アナトリアでもルーム・セルジューク朝の追求を受けた。従ってババイ運動関係者の多数は安全な避難地を求めなければならなかった。当面对象となるべき恰好の隠れ家はトルクメン部衆のフドウト・ウジ(Hudut uc)のなかであった。改めて蛇足を付するまでもないが、フドウト・ウジはムハリブ(戰士)たちがキャフィル(異端)からの攻撃に備え、他方機会あらばキャフィル地区にアクン(掠奪)を仕掛けガニマー(分捕品)を入手する拠点、すなわちヤウマ・アクヌ(Yagma akını)であった。諸他のババイ運動に加盟した一味関係者はアナトリアからの脱出を計り、或る者はカフカーズ、クリム、シリア、さらに遠くエジプトに逃亡した。ヌレ・スーフィ・ベイも例外ではなかった。彼は教祖ババ・イリアスの子息で同時に協力者でもある Muhlis Baba と共にアナトリアの僻地を転々として逃避行を続けて移動し乍ら苦心の末、上記エルメナークのフドウト・ウジに辿り着くことが出来た。

なおこのムフリス＝ババは、半ば伝説に包まれた詩人、又神秘主義思想家としても知られるアリこと *Aşik Paşa* (1272-1333) の父、またオスマン古典史家のアシク＝パシャ＝ザデの直系近祖に当る。このような危機のり切りに際してムフリス＝ババがヌレ＝スフィ＝ベイに示した協力の度合や性質は単に「タリーカ」組織体内部での盟友関係の範囲に留まらず、カラマンの国づくりに多大の役割りを果している。それというのもムフリス＝ババはヌレ＝スフィ＝ベイの継嗣 *Kerimüddin Karaman Bey* に対し並々ならぬ親愛の情を注ぎ、将来「タリーカ」のシェイフとしても衆望をつなぎ得る人物たらしむべく薫陶しているからである。

このことは、やがてこの継嗣が将来、宗教上のレイスとして又、「ババイ＝タリーカ」の首長の格式を以ってカラマン部民を統率し号令するのに役立ち、惹いて政治上のリーダーとしてカラマン君侯国の基礎を堅めその整合性と持続性を保証するのに役立ったからである。

ヌレ＝スフィ＝ベイは、恐らく一二三九年から五六年頃までの時期にエルメナーク地区にあるフドウト＝ウジ内でカラマン部衆の首長におさまった。その地位は、対敵戦闘行為の指揮者、部衆団結のための組織者や管理者であった。ヌレ＝スフィ＝ベイの場合は、加之、民衆宗教面で所謂 *tribal Baba* 換言すれば宗教上のシェイフの機能を最大限活用して支配地の拡大と地盤強化に役立てた。前述ネシュリーの『キターブ＝ウジハンニュマ』のセルチックラルの条のうち「*Fethü Kalati Ermenâk bi yedi Karaman*」〔カラマンの手によるエルメナーク城砦の征服⁹⁾〕の項は、そうした動向の記述と見るべきであろう。これを要するにシェイフとしての指導性、山岳地帯の地域特色を活用した部民のバイタリテイ、部民人口の規模、さらに眼を転ずればタウロス山系森林産出の木材需給関係を通じてエジプト方面との提携も期待出来た筈である。その面での説明はエジプト史の領域に属する。

因みにヌレ＝スフィ＝ベイは何時頃の出生、何時頃の逝去か。実はこの点に就ては判然としないのである。但し一二

五七年以後の出来事には最早その名称は出て来なくなり代って、継嗣ケリミューデイン＝カラマン＝ベイの名称だけが登場して来ることも、年齢推定に対して一つの目安となる。この継嗣については畧述するが勇敢な騎士で夙にヌレ＝スーフイ＝ベイを補佐し一五三九年以降エレウリやシリフケなどの要地にアクンを仕掛けていることも併せ記して置きたい。その他諸般の事情を綜考するとヌレ＝スーフイ＝ベイは一二五六～七年頃の逝去の筈である⁽¹⁰⁾。

尠くとも一三六〇年まで生存していたとは考えられないのである。若しもタフシン＝ユナルの所説の如く最大限六十才まで生存していたとする所説を採用して逆算すれば、恐らく西暦一三二〇年前後の出生となるであろう。

註

- (1) Hamd Allāh Mustarfi: Nuzhat al-Kulūb, (Fatih Kutūphane, nr. 4518) 参照
- (2) Tahsin Ünal 前掲書 S. 31.
- (3) ibid. S. 32 参照、なお余談乍らヌレ＝スーフイ＝ベイを以てアルメニア系とみなす所説は臆測にすぎない。
- (4) The Cambridge History of Islam, vol. I, The Central Islamic Lands, Cambridge, 1970, p. 251.
- (5) The Encyclopaedia of Islam (新版) vol. I, fasc. 14, 1958, Leiden & London.
- (6) Batıniye とは内容的にはイスマイリア派その他四派を指す。それは Sufi と Shia とが結合する重要なポイントと云われている。ベクタシュ＝ターリカもバトウニエの系統を引くといわれる。
- (7) イスラーム神秘主義教団へのシャーマニズムの影響について Fuad Köprülü: Influence du Chamanisme Turco-Mongol sur les ordres mystiques musulmans, p. 13, İstanbul, 1929 など 参照。
- (8) Bl. Topremekski: Точка зрения Сельджукской Маорі Aznı, 1941, Москва p. 8 参照。なお上掲、拙稿「小アジア(ルーム)＝セルジューク朝史研究のための本原史料と傍証史料」p. 7 参照
- (9) Faik Reşit Unat, Mehmed A. Köymen: Mehmed Neşri, Kitāb-ı Cihan-nümā Neşri Tarihı, 1, Cilt, S. 45-47, T. T. K. Ankara, 1949.
- (10) ヌレ＝スーフイ＝ベイの墳墓は東部アナトリアのムト (mut) のカーザに属するスイナンル＝ナヒーエのデイルメン リック (Değirmenlik) のヤイラ (高原) に所在する。

五 ヌレ＝スーフイ＝ベイの思想と信条

古来、時代の流れと共に Hellenization, Romanization, Christianization, Islamization, やるゝ Turkification 時に Nomadization の波に洗われ続けた変転極りない歴史性に則して、しかもその間に於て地方都市農村を通じて行われたトルコ系、非トルコ系の種族混淆現象に照らして、アナトリアの天地は宗教信条や思想に於いて多種多様なパターンを示し、新旧とが重層し錯綜して複雑な様相を呈していた。そのような安定性を欠く情況下に於いて十二、三世紀のアナトリアは、若干の卓越したイスラム神秘主義思想家を中心に任意に形成された外見的に相異性をもつ幾つかの「タリーカ」が簇出し生長発展をとげた時代で、それらが重厚なホラサン＝スーフイズムの影響を受容していたことは既述の通りであるがババイの指導者ババ＝イリアスの主宰する「タリーカ」もそのカテゴリーに当然入る。冷やかにして無味乾燥なオルソドックス＝イスラムよりも、むしろ感情ゆたかな宗教として、民衆の当面する要望を汲み取り乍ら、何処までも民衆イスラムの立場に終始し、アナトリア社会の実情に則応する密着性をもったことは勢力の拡大と滲透に寄与した。民衆イスラムという点では、他の「タリーカ」とも類似性をもつが、⁽¹⁾宗教生活面で諸他の宗教、信条に対しは一概に排斥や対立ムードを深めることなく、又「縁なき衆生」といった高踏的態度を固執することがなかった点が特色として指摘され得るのである。

ババ＝イリアスの「タリーカ」には、むしろ民衆運動参加への呼び掛け方式として、あらゆる種類の解釈や註釈、註解を許して本来持つ対立性を出来得る限り柔らげ、積極的に広般な民衆を包括して行く寛容的思考方式を持ち続ける態度が明瞭に見出される。

このような態度は、少くとも教勢拡大、民心収攬という点では極めて効果的かつ合目的であったと云えよう。⁽²⁾

ところでモンゴルのアナトリアへの侵入は恐らく東方からのシャーマニズムの影響を一しお強める作用をなし、「タリーカ」の信条や勤行に対して可成り微妙な、時に又急激な変容をもたらしたと思われる。そうしたムードの裡でババリーアスの「タリーカ」も恐らくイスラム信仰の枠の中で正統と異端の間を行きつ戻りつしながら、一方では最大限、本来持ち合わせる宗教的な寛容度を發揮して、アナトリア在住のギリシア正教徒、アルメニア・グレゴリ派など東方教会派、乃至はユダヤ教徒との連帯感を深めたのではなからうか。

ババリーアスの門下にあつてヌレースーフィーも又、形而上的な学識を身につけると共に直接師から社会、經濟、政治に関する諸問題への考え方、対応の仕方などを修得し、同時に又、ババリーシェイフの一人として、師から如上のまさに融通無碍とでも云うべき寛容性も学び取ったものではあるまいか。このことは東南アナトリアに居住する種族、宗派、信条、生活様式の面で個々ばらばらな住民層をカラマン部族を中心にとめ上げるために極めて有効な接着剤として作用したものゝ如く想像される。但しそれは推定の域を出ない。それというのも、実証的な資料が殆んど残存せず零細な断片的な事情を伝えるものがない訳ではないが、根本資料として役立つ満足なものが見出しえない憾みがあるからである。⁽⁴⁾

註

(1) Hamilton Gibb: *Mohammedanism*, 1949 Oxford,

U.P. 邦訳、加賀谷寛訳「イスラム文明―その歴史的形成」

(1967), p. 170 参照

(2) カップドキア方面に見受けられる洞窟寺院や修道院が十三

世紀に最後の繁栄を迎えるのは、このようなイスラーム、キリスト両教の宥和ムードと無縁でないような気がする。

(3) タリーカのうちにはセンセイショナルな離れ業に近い勤行すら行われるに至った。

(4) Tahir Ünal 上掲書 S. 43 参照

六 君侯国の成立時期

ヌレースーフィーベイがババイ運動の挫折後新しい行動を起す時期は一二三九年頃からで、エレウリ地区、その後、

南部アナトリアの地中海に面するシリフケ城砦をも取得するに至った。⁽¹⁾ ババイの反乱で惨怛たる痛手を受けたルーム＝セルジューク国家は一四一〇、四二年に掛けて東部アナトリアに姿を現わすモンゴルの先鋒と次いで四三年のキョセ＝ダウ〔シウェアスの東方八〇キロ〕でノヤン＝バイジュ〔諸顔拜住〕の率いるモンゴルの来襲軍団のため無残な大敗北を喫したこと、その後続くモンゴル側の懲罰的な行政措置の強行などでアナトリアの政局は混沌となるが、この混沌に乗じて漸増的に強力化して行くのがカラマン党という伏流であった。ヌレ＝スーフィ＝ベイの勢力はアフシャル族などオウーズ部族集団の分布するシリア方面から側面的援助も期待できたのではあるまいか。シャハベッティン＝テキン＝ダウ教授によるとバフリ＝マムルーク朝（一二五〇～一三九〇）の勃興期に於いて沿岸地区に定着したアレツポ、ダマスクスのトルクメン族は、地方マムルークの間断なき内紛に乗じてシリア、エジプト方面の重要地点を入手し、アル＝ルーミと呼ばれるグループとしてマムルーク吏僚の間で幅をきかしたことを伝えている。⁽²⁾ カラマンに関してはこのような歴史性をもつシリアの動向、とりわけ、反モンゴルの傾向をもつマムルークの存在を思い併せる必要がなからうか。

既に統制力を失ったルーム＝セルジューク朝スルタンは、ヌレ＝スーフィ＝ベイの恣意的行動に対してババイの反乱時の如くフランク傭兵団の力を借りることも出来なかった。

ヌレ＝スーフィ＝ベイを処罰するどころの事態ではなかった。むしろ諸スルタンは、アナトリアで名目化しつつある支配権を維持して行くために学識者、知識層、デルヴァイシュ、ババ、シェイフなどの懐柔に吸々としていた。懐柔のための常套手段は、官位、官職、称号などの好餌であった。彼らをスルタンの側に吸引するためには、イマレットやテケを設営し、モスクを創建し、ワクフを寄進した。又イクターを与える形で地方州の太守権や時に又ウジの支配権を公認した。

エレウリ、シリフケ地区に勢力を確立しつつあるヌレ＝スーフィ＝ベイに対し、スルターンがヒラート〔大礼服〕クルチ〔劔〕ダウール〔楽器〕アレム〔旗指しもの〕を、スルターンの従兄弟に当るアクサライの君侯メリク＝アルスラーンに

スルターンにせよ、ンゴルにせよ双方の施政態度や徴税システムに満足しない、ババ、シェイフ、ウジ・ベイなどは寧ろ統制のきかない状況を利用して、いよいよ自立体制を堪める衝動に駆り立てられた。そうした地方の動きに対し、武力鎮圧が出来ない以上、不本意乍らも法秩序を紊すババやウジの勝手気儘な振舞を黙認・放置せざるを得なかった。素よりヌレ・スー・フィ・ベイも例外ではなく、スルターンも、背後から督令するモンゴルの総督もアナトリアを完全把握できない大きな焦慮の裡にも如何とも手の施しようがなかった。

註

I. Ü. E. F. Yayınlarından N. 887, 1961, S. 36.

- (۱) Hazārfan: Talhis al-bayān fi tahlis al-buldan. (۲) T. Yılmaz Öztuna: Başlangıcından zamanımıza (۳) Şahabettin Tekindağ: Berkuk Devrinde Memlük kadar Türkiye Tarihi, 2 Cilt, S.135. Sultanlığı XIV Yüzyıl Mısır tarihine dair araştırmalar,

七
む
す
び

小アジア・トルコ化の一側面

弾き出されたいわば『あぶれ者』として兎角「厄介」視される傾向が強く、このような事情が又オウーズの歴史を動かして行くといった成行は研究者の間では一つの通念となりつゝある。アナトリアに於けるカラマン部衆の場合も同様ルームセルジュークの体制から弾き出された存在であり、唯この場合カラマン部衆はエネルギーの捌け口をババイ運動の中に求め、ババイ運動に持っていたのである。その帰結として生まれるカラマン政権の基本性格は、デルヴィッシュスーフイ政権そのものであり、ババイ運動なくしてカラマン君侯国なく、又その運動を指導したヌレスーフイベイなくしてカラマン君侯国なしと敢えて云い度いのである。一言にして云えば、ババイヤンの発展形態の終着点こそカラマン君侯国の出現と云えるであろう。

シェイフ、ババ、スーフイの如きイスラムの聖職者要素が世俗的権力に進化して行く過程を若し敢えて他に類似を求めるならばイランのサファヴィ王朝の持つ基本性格に酷似しているようである。アナトリアの諸他のガーズィ国家のもつ基本性格として、オスマン君侯国が、フドウトウジベイの勢力を中心に置くガーズィ集団と都市職能ないし技能集団であるアヒーとの合作、それに外廓的な支持者としてビザンティン系テクフル〔封建領主〕の協力が加わり成長をとげ、ブルハネッディンアフメットの君侯国が回教法官の出自をもち、メンテシェ君侯国が有力な水軍を擁するムスルマンコルサン〔海洋冒険者〕の系統に属し一時はロードス島攻略を敢行する動きを示すなど、結論としてアナトリアのトルコ化にはさまざまなジャンルがあり、それらが相互に並行、呼応してこの大半島のトルコ化を推進させる要素となったことを改めて指摘したいのである。要は、とかくオスマン史一辺倒となり勝ちな従来の傾向に対するアンチテーゼの意味あいをこめて述べた次第である。

(竹田教授の御健勝を祈りて)